新 潟 市 報 道 資 料
令和８年１０月９日

報　道　各　位

坂口安吾生誕祭実行委員会事務局
（新潟市文化政策課）

坂口安吾生誕120年記念「環日本海・坂口安吾国際シンポジウム」―海を越えて広がる安吾文学の新たなる可能性―を開催します

新潟市出身の作家・坂口安吾（1906－1955）の生誕120年を記念し、「環日本海・坂口安吾国際シンポジウム」を開催します。

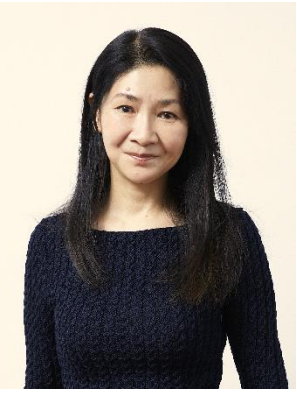
新潟市出身の翻訳家・斎藤真理子氏、作家・藤沢周氏による生誕120周年記念講演のほか、中国・韓国・ロシアの多彩な登壇者がそれぞれの視点から、安吾文学の魅力と新たな可能性を探ります。

生誕120年という節目に、安吾文学を国内外の視点から捉え直す貴重な機会です。

ぜひ、取材・報道くださいますようお願いいたします。

記

概　要	
日　時	10 月 18 日（日）13:00～16:30（開場 12:30）
会　場	りゅーとぴあ 新潟市民芸術文化会館・能楽堂 （新潟市中央区一番堀通町 3-2）
参加費	無料
定　員	200 名（先着順、要事前申込）※定員に達したため、受付を終了しました。
内　容	第 1 部　生誕 120 周年記念講演 1.「翻訳家から見た韓国、日本そして安吾」 …斎藤　真理子（韓国語翻訳家、著述家） 2.「タンテイ安吾の張り込み術」…藤沢　周（作家） 第 2 部　各国代表者による発表＆パネルディスカッション 1. 各国代表者による発表…自国での安吾の読まれ方について 2. パネルディスカッション…安吾文学の普遍性と新たなる可能性



斎藤真理子氏

藤沢周氏

※取材いただく際は、下記問い合わせ先へ事前にご連絡ください。

〈お問い合わせ〉坂口安吾生誕祭実行委員会事務局（新潟市文化政策課内）
担当　関谷・井上　　電話　025-226-2624（直通）

坂口安吾生誕祭 120

環日本海・坂口安吾国際シンポジウム
——海を越えて広がる安吾文学の新たなる可能性

少年時代、安吾は砂浜に寝ころび
張り裂けるような気持ちで日本海を眺めた
シベリアおろしの風が吹き、荒涼とした海原に
絶対の孤独という、懐かしいふるさとを見た
100年の時を経て、安吾の叫びは海を越え
遠い異国からふたたび木霊のように還ってきた
新たなる時代の黎明と共に……

2026年10月18日(日)
13:00(12:30開場)〜16:30

第1部／生誕120周年記念講演
斎藤真理子(さいとう・まりこ／韓国語翻訳家、著述家)
「翻訳家から見た韓国、日本そして安吾」
藤沢周(ふじさわ・しゅう／作家)
「タンテイ安吾の張り込み術」

第2部／各国代表者による発表&パネルディスカッション
1.各国代表者による発表——自国での安吾の読まれ方について
2.パネルディスカッション——安吾文学の普遍性と新たなる可能性
<海外パネリスト>呉玥瑶(ご・げつよう／中国)　黄益九(ファン・イック／韓国)、
アンドレイ・フェシュン(ロシア)

場　所　りゅーとぴあ新潟市民芸術文化会館・能楽堂
定　員　200名(先着順・要申し込み)　参加費　無料

坂口安吾
デジタルミュージアム

お申し込み　①坂口安吾デジタルミュージアムからお申し込み
② ①にて申請が難しい方は、新潟市役所コールセンター(025-243-4894)へ電話
受付期間:9月23日(水)8:00〜10月14日(水)21:00
参加を希望する全員の氏名、代表者の電話番号をお知らせください

お問い合わせ　坂口安吾生誕祭実行委員会 事務局(新潟市文化政策課内)
TEL 025-226-2624

主催　坂口安吾生誕祭実行委員会
(安吾の会、松之山安吾の会、安吾を語る会、阿賀浦コミュニティ協議会、東洋大学交友会、
にいがた文化の記憶館、BSN新潟放送、新潟日報社、新潟市、新潟市芸術文化振興財団)
後援　新潟県、(公財)新潟市国際交流協会、(公財)新潟観光コンベンション協会
協力　樋木酒造、新潟・市民映画館 シネ・ウインド　　デザイン　はれび

撮影／三堀謙二　　資料提供／新潟市「安吾 風の館」事業室

坂口安吾企画展「処方箋文庫®」
坂口安吾の作品世界を"診療"に見立てて体験する展示企画です。

会期／10月16日(金)〜10月20日(火)
時間／16日(金)〜18日(日)9:30〜19:30
19日(月)〜20日(火)9:30〜17:30
会場／りゅーとぴあ 新潟市民芸術文化会館 4F ギャラリー
入場料／無料　定員／なし　申込／不要
問合せ／坂口安吾生誕祭実行委員会 事務局
025-226-2624(新潟市文化政策課内)

坂口安吾展 初公開「信長」自筆原稿

会期／Part1 7月7日(火)〜9月1日(火)
Part2 9月3日(木)〜11月3日(火)
会場／ほんぽーと(新潟市立中央図書館) 2F 特別コレクション室
入場料／無料
問合せ／「安吾 風の館」事業室 025-222-3062

環日本海・坂口安吾国際シンポジウム

――海を越えて広がる安吾文学の新たなる可能性

いま、安吾作品は中国、韓国、ロシアなど東アジアの人々に読まれています。毎年4月から9月の第2土曜日に行われている安吾読書会にも、Zoomなどを通じて海外からの参加者が増えています。国境を越える安吾文学の魅力と可能性を、新潟市出身の翻訳家で韓国文学にも詳しい斎藤真理子さんと、芥川賞作家の藤沢周さんの講演によって明らかにします。さらに各国の安吾研究者などによる発表とパネルディスカッションにより、各国での安吾文学の読まれ方、作品を通じての国境を超えた相互理解や国際交流の可能性まで掘り下げてみたいと思います。

1906-2026
坂口安吾
ANGO SAKAGUCHI
生誕祭
120

第1部

生誕120周年記念講演

講演1 斎藤真理子「翻訳家から見た韓国、日本そして安吾」

講演2 藤沢周「タンテイ安吾の張り込み術」

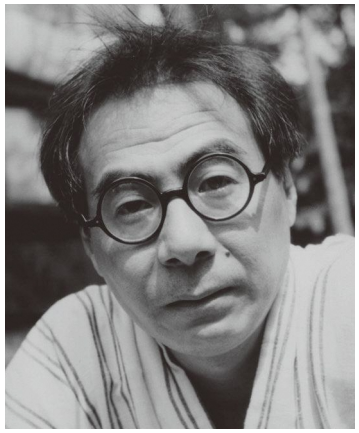
第2部

各国代表者による発表&パネルディスカッション

1.各国代表者による発表――自国での安吾の読まれ方について

2.パネルディスカッション――安吾文学の普遍性と新たなる可能性

パネリスト／斎藤真理子、呉玥瑶、黄益九、アンドレイ・フェシュン、小川弘幸
ファシリテーター／本間大樹



坂口安吾

（さかぐち・あんご）

1906年10月20日、新潟市西大畑町生まれ。旧制新潟中学から東京の豊山中学に編入学、小学校の代用教員を経て東洋大学印度哲学倫理学科卒業。敗戦直後の1946年に「堕落論」を発表し、一躍脚光を浴びる。純文学だけでなく、評論・エッセイ、推理小説、歴史小説など多彩なジャンルの作品を発表した。太宰治、織田作之助らとともに戦後無頼派と称される。55年2月17日、桐生市の自宅で脳出血で死去。主な作品に「日本文化私観」「白痴」「桜の森の満開の下」「不連続殺人事件」「安吾新日本地理」などがある。

撮影・増永彩子

斎藤真理子

（さいとう・まりこ）

韓国語翻訳者、著述家、編集者。1960年、新潟市生まれ。姉は文芸評論家の斎藤美奈子。明治大学文学部史学地理学科考古学専攻卒業。2015年、パク・ミンギュ『カステラ』で第1回日本翻訳大賞受賞。2024年、翻訳を手掛ける韓国の女性作家ハン・ガンがノーベル文学賞を受賞し、翻訳家としての活動がさらに注目される。2025年にハン・ガン『別れを告げない』で第76回読売文学賞（研究・翻訳部門）を受賞。その他著書に『増補新版　韓国文学の中心にあるもの』、『本の栞にぶら下がる』、『「なむ」の来歴』など。

藤沢周

（ふじさわ・しゅう）

作家。1959年、新潟市生まれ。新潟明訓高等学校、法政大学文学部卒業。書評紙『図書新聞』編集者などを経て、1993年『ゾーンを左に曲がれ』（後に『死亡遊戯』と改題）でデビュー。1998年『ブエノスアイレス午前零時』で第119回芥川賞を受賞する。著書に『サイゴン・ピックアップ』『オレンジ・アンド・タール』『波羅蜜』『武曲』『武蔵無常』『サラバンド・サラバンダ』『武曲Ⅱ』『世阿弥最後の花』『遊ビヲセントヤ: 想う、迷う、考える。』など多数。その他ラジオ、テレビ出演、講演、各種文学賞の選考など、幅広く活動を続けている。元法政大学教授。

呉玥瑶（ご・げつよう）

神戸大学人文学研究科修士課程一年生。2003年、中国・北京市生まれ。研究対象は高橋和巳。北京外国語大学日本語専攻卒。卒論テーマは「安吾の『青春論』論――宮本武蔵像の検討を中心に」。高校時代に「堕落論」と出会い、文学研究の道を志す。文学を通して歴史と文化のつながりを探り、日中の文学研究および出版交流に携わることを目指す。

黄益九（ファン・イック）

国立釜慶大学校 助教授。1973年、韓国生まれ。筑波大学大学院を修了。現在、近代日本文学・文化研究を続けている。安吾に関する研究としては、論文「戦後日本の「主体性」の論議と坂口安吾の発想」『韓国日本文化学報』94、2022年（日本語）、論文「一義的価値と共同体―「桜の森の満開の下」における社会的メカニズム」『日本文化研究』83、2002年（日本語）、論文「『暁鐘』版「桜の森の満開の下」」『坂口安吾論集Ⅲ 新世紀への安吾』坂口安吾研究会、2007年（日本語）などがある。

アンドレイ・フェシュン

モスクワ国立大学東洋学部准教授。1957年、ロシア・モスクワ生まれ。モスクワ大学東洋語学部卒。博士号（仏教史）。1988～2003年、ＮＨＫ、ＴＢＳ助手、2003～2009年、ＲＩＡノーボスチ通信東京支局長。2009～2011年、駐日ロシア大使館科学文化代表部代表。2011～2018年経済高等学院日本課長、2018～2022年在パキスタンロシア科学文化代表者、2022 ～現在モスクワ大学東洋学部副学部長。坂口安吾の『堕落論』『続・堕落論』をロシア語に翻訳し自国に紹介する。

小川弘幸（おがわ・ひろゆき）

ゆいぽーと新潟市芸術創造村・国際青少年センター副館長。1962年、新潟市（旧新津市）生まれ、1992年イベントプロデューサーとして独立し、文化現場を設立。水と土の芸術祭2012プロデューサー。1987年の安吾の会の発足メンバーで現在世話人共同代表。編著に『甦る坂口安吾』、新潟・文化批評誌『風だるま』など。

本間大樹（ほんま・たいき）

安吾の会会員。1963年、新潟市生まれ。東京の出版社に勤務後、2007年フリーの編集＆ライターとして独立。地域の歴史、文化、生活に関する記事を書く。2024年9月、佐渡の郷土文化雑誌「Ikki」を創刊。